ネギまで会社を作ってみた。

九音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ネギまで会社を作ってみた。

【Ｎコード】
Ｎ４１８０Ｌ

【作者名】
九音

【あらすじ】
ネギま世界に転生してしまった元オタクの主人公
チートな能力がない彼がどんな人生を歩んでいくのか

普通は焦ります（前書き）

未熟者が書いた作品ですがよろしくお願いします

普通は焦ります

ーーーーーーーーーー１９８８年　滝錬太郎　転生する　原作　エヴァンジェリン封印

滝錬太郎は転生者である。しかし家族構成に変化がないため逆行であると認識

ーーーーーーーーーー１９９０年　滝錬太郎（二歳）　魔法を知る

家族が普通に魔法らしきものを使っているのを見て前世とは違うことを認識した。

目の前にいる家族は姿かたちは似ていても違う存在である事に気づき泣いた。めっさ泣いた。

心配した家族に慰められた。

三日後開き直った。

（立派な魔法使いではなくモグリの魔法使いらしかったけど）

ーーーーーーーーーー１９９５年　滝錬太郎（七歳）世界を知る　原作　明日菜、麻帆良学園に転校して来る。

さて、なぜか転生してしまった滝錬太郎です。

転生前も転生後も滝錬太郎です。些細なことだが名前が変わらなかったことに安心しています。

初めの頃は『俺も転生者としてチートな能力が付加されてるのか？』と思っていろいろ試してみたのですが、

そんな事はなく魔力も気も平均的な量しかありませんでしたよ、

転生して変わったのは『おかしい位上昇した金運』と『人に好かれやすい』ことくらいです。

おれ自身の戦闘力は皆無です。俺ｔｕｅｅｅｅ的な要素なんて欠片もありません。

ネギまの世界でこれはあまりに致命的すぎます。結論として原作にかかわるのは諦めました。

・・・・・・・諦めたのですが、別の問題が起きました。

切欠は出鱈目な金運のせいで集まったお金を使用して、気まぐれに企業を起こした事が全ての始まりでした。

初めは唯の古本屋だったのに今では様々な分野で規模を拡大し世界

中に支部を持つ大企業になってしまったんです。

今では家族総出で会社経営してます。親父も母さんも仕事辞めて手伝ってくれてます。

転生する前の世界は２０××年でしたがこの世界はまだ『１９９５年』、前世と違ってＩＴ部門もそんなに発展していない時代でしたから、

元オタクの俺にとっては住み辛い環境だったんで、何年も待てるかー！！って感じで自分でやろうと思ったら・・・・・

いつの間にか世界規模の大企業の仲間入りーということになってたんですね。残念っ！

もちろん趣味として実家近くに作った古本屋は残してありますがね、それでも「ありえんｗ」と思わず呟いてしまった。

でもまぁこれはいいんですよ、問題はあまりに急激に成長したうちの会社に『魔法使い』が忍び込んできたのが問題でした。

偶々会社にいた親父にボコボコにされていましたけどねー。

しかし、話を聞いてみると彼もそれなりに理由があったようで

彼はいわゆるスパイというやつでして魔法を使えば忍び込んでもバレる訳でないし、それで生計を立てていたらしいんですね。

「立派な魔法使い」は目指さないのかと聞けば名誉で腹は膨れませんとのこと、そりゃーそうだと納得してしまったが。

これは問題です。彼のように企業スパイとして入り込んでる魔法使いがいるかもしれません。

本社はうちの家族が警備をするからいいとしても他まで目が回るわけがない。どうしようと悩んでいたところ

「じゃあ警備部門として魔法使い雇えばいいじゃん」

という親父の一言で警備部門として魔法使いを雇う事に。

彼のように「立派な魔法使い」を目指さずにモグリで仕事をしている人たちは結構いるようでして（うちの家族もだけど）

彼らは基本仕事がなくて困っているそうなので、募集をかければそれなりの数か集まるだろうとのこと。

スパイとして忍び込んできた彼（風間育郎２４歳独身）を交えて話し葉をはじめる親父達、もー勝手にしてくれ！

魔法には近づきたくなかったのにどーしてこうなるのか、面倒ごとはいやでござる！！

普通は焦ります（後書き）

批判が多いと作者は逃げ出します。メタルスライム的な意味で

金＞チート（前書き）

茶羽根さん、野良猫さん感想ありがとうございます。
感想をもらったので　私のやる気は十分に補充されました。

とりあえず2話目です。

金>チート

「おはよーございます。社長」

「・・・・ああ、おはよう風間さん」

前回のスパイ進入から二週間がたちました。風間さんは結局そのまま警備部として雇う事になった、

警備部を作るなら、素人ばかりじゃなくスパイ経験のある人間がいたほうが対策が立てられるとのことで彼にはうちに入社してもらう事に。

なんか独身なのに扶養家族がいたらしく泣かれて感謝されました。孤児だった子を拾ったらしいです。

魔法を使って仕事をしていると、魔法協会のほうから『立派な魔法使い』が派遣されてきてボコボコにされた後に暫く無償で働かされるとのこと。

もちろん彼らは日常生活で普通に魔法を使っているようですが、話

を聞いていると協会に所属していないと魔法を使うは許されないそうなんですよね。

しかし、所属すればいい様に使われてしまう。だからこそもぐりの魔法使いは減らないらしい。

彼もそんな中の一人だったのだが家族ができて協会に所属するか迷っていたらしい、

しかし彼は家族が一般人であるにも拘らず自分が魔法を使える事を話してしまっていたのだ。

もし協会にばれたら記憶を改竄されてしまう。家族にそんな事をされたくはなくギリギリの所で今の仕事を続けていたらしい。

そんな状況だったからこそ、うちの庇護下に入れることが嬉しかったそうなんですよ。

まぁ彼の話はおいといて魔法使いによる警備部を設立する事になったんですが募集をかけたところ凄まじい数の人がやってきた。

今回募集を聞いてやってきた数は約７００人、驚く事に全員モグリ

の魔法使いである。

風間氏の話を聞いて集まってきたらしく扶養家族を持っているため是非うちで働きたいのこと、

話が広まるのが早いとも思ったが、モグリの魔法使いには彼らによるネットワークが存在するらしく親父や風間さんがそこで話題に出していたらしい。

まぁいて困るわけではないので全員雇ったけどな。

因みに現在も募集を聞いて集まってきています。

警備部だけでどんだけ雇ってんだよと思ったけど、よく考えたら世界中にある支社を警備してもらわなくちゃいけないのでどう考えても７００人程度じゃあ足りない事に気づいたんですよ。

原作において、『超が魔法使いの総人口は６７００万人で、東京圏の人口の約２倍』と言っていたがこれはモグリの魔法使いを含めていない数である。

まぁモグリの魔法使いの数なんて調べようがないしね。

モグリの魔法使いの数は大体４０００万人より少ないくらい。そのうち全員がうちに流れてこないだろうかとも心配になったが今更考えても仕方がないので気にしない事にしたよ。

気になるのは彼らの能力なのですがかなり高かったです。

人数的には魔法使いランクで言うとランクＣの人が３割ランクＢが６割ランクＡが一割です。

ランクＢなんてしょぼいと思うかもしれませんがそんな事はありません。平均的な戦力が多い事が重要なんです。

突出した能力を持った人も重要ではあります。しかし社会において最も重要なのは、『数』なんですよ。

今回警備に必要な人材の募集でしたからこれは願ったりなわけです。突出した戦闘能力を持った人がいたらみんなでボコればいいんですから。

たとえ私たちが束になっても敵わない様なチートな存在が現れたとしても、こちらが企業として社会に存在している以上、敬遠されるのは相手側ですしね。

ぶっちゃけ戦闘能力チートな存在は現代社会には必要ないんですから。

因みに私は現在7歳です。普通は社長なんて出来る訳がありませんが表向きは宣伝目的という事で国に許可をいただいてます。

もちろん魔法でごまかしたりしてはいません。マネーパワーです。

こちらは世界規模子企業、国に払っている税金は馬鹿になりません。

『お願い聞いてくんなきゃ他の国に本籍移しますよ』

といったら快く頷いてくれました。勿論それなりの礼金は払いましたが。

今なら言える！チートなどいらぬ！！

・・・やっぱり少しは欲しいかも

金＞チート（後書き）

お気に入りに登録して頂いたり感想をもらえると作者は狂喜乱舞します、会社で。

幼女を拾った（前書き）

けたさん、大根好きさん、偽者さん、のんのんさん、ビウィグさん、ソルバ１３さん　　感想ありがとうございます。作者のやる気はさらに上昇中です。

幼女を拾った

ｓｉｄｅ＞？？？？＜

活気あふれる社内、今日も私の一日が始まる。

「お疲れ様です社長、次の書類をお持ちしました。」

私は大量に積み重なった書類の前で仕事をこなしている彼に声をかける

「あぁ、ありがとう京」

彼の名は『滝錬太郎』この企業の実質的なトップである。

表では若干七歳でありながら大企業を纏め上げる手腕を持つ人物であり、裏の世界では魔法使いたちを纏め上げているカリスマの持ち主。

だが決してその事を威張る事はない、むしろ彼は非常に優しい。それは私が一番よく知ってる。

私の本名は『ルキ・スプリングフィールド』、立派な魔法使い達の中で英雄とされてるナギ・スプリングフィールドの娘である。

しかし、私は魔力が極端に少ない。その理由は私が転生者であることにある。

私が前世で死んだ後、とても大きな存在が目の前にいた。いわゆる神様だったのかもしれないし違ったのかもしれない。

確実にいえるのは、奴は私に転生するチャンスをくれたこと。

私はその時に『ネギまの世界』への転生と東方の『境界を操る程度の能力』を望んだ。

一度でいいから漫画の世界に行ってみたいと考えていたから正直私はすぐにこの話に食いついた。

奴は確かに私の望みを叶えてはくれた。しかし、それだけだった。

奴がくれたのはそれだけ、ネギ・スプリングフィールドの姉『ルキ・スプリングフィールド』として転生してからは嫌な思い出しかない。

魔力は少ないし、頼みの綱の『境界を操る程度の能力』も使う事は出来るが使いこなす事は出来なかった。

私は絶望した。戦う力がない事はこの世界において余りにも致命的だ。

生まれた村では私に対する差別などはなかったが、周囲の私に対する目が僅かなりにも哀れみを含んで要るものもいた。

恐らく悪気はないのだろう、人は本能的に人より優位に立ちたがるものなのだから。

私もそれは気にしてはいない。彼らは心から私を心配してくれていたのだから。

私が我慢できなかったのは、弟であるネギ・スプリングフィールドから心配されたことだ。

子供は純粋だ。だから仕方がないとでも？

そんな事はない、周りは子供同士だからと思うかもしれないが私の精神年齢としてネギの倍以上生きている。

一回り以上歳の離れた子供に憐れみの目を向けられたのだ。私の精神は深く傷ついた。

もはや私の中では生前の『ネギま』に対する憧れはなかった。

ーーーーーーー『悪魔による村の襲撃』後、私の生活はより酷くな

っていった。

魔法学校において魔力の極端に少ない私は苛めの対象だったし、私も関る気など既に無くなっていた為孤立していった。

そんな時、本国からの査察官がやってきた名目上は学校の査定だったが実際は私の排除だった。

『悪魔の襲撃事件』において私とネギを始末するつもりだったが失敗、

原作においては、その後ネギに対する周囲の守りが堅くなってしまったため諦めていたのだろう。

しかし、イレギュラーである私は違う。周囲から孤立しているため守りも薄い。

子供の私が抗えるはずもなく、私は査察官の手により強制転移させられた。

不幸中の幸いとでも言うべきか、私は能力を持っている。

本来、１０歳にも満たない子供なら見知らぬ国に転移させられればのたれ死んでしまうだろう。

だが生憎私は普通の子供ではない。能力を使えば目的地に移動するぐらいなら問題ないのだ。

しかし私は家に戻る気などなかった。

私が目指したのは前世の故郷でもある日本、そこには私の家族などいない。

そんなことはわかっていた。それでも私は気がつけば日本へとスキマを繋げていた。

そして私は、彼に『滝錬太郎』に出会った。

何故なのかは私にもわからない。だが、彼といると何故か安心する。色々なことを話した。趣味趣向などの他愛ないものから自分が転生者であることまで。

初めは自分以外に転生者がいるとは思わなかったし、自分から話すつもりは欠片もなかった。

だが彼から「君も転生者なのか？」と聞かれてつい頷いてしまった、彼は自分から打ち明けてくれた。

だからだろうか、私も自然と彼に心を開いていた。

彼との時間は、これまでの生活で傷ついていた私の心を癒すには十分すぎた。

全てを話し終えた後、彼は「俺のところに来い」と言ってくれた。

あの日の事は今でも鮮明に覚えている。

私は、あの日から『ルキ・スプリングフィールド』を名乗るのを辞めた。

今では前世の『橘京』を名乗っている。

あの日あの時から私は彼に惹かれ始めていたのかもしれない。

彼は私に居場所をくれた。

彼は魔法使いとしてではなく私を見てくれている。

私は確かに此処にいる。

転生を選んだ自分を恨んだこともあった、けど今なら言える。

――――――――――――――――――――――――私は今幸せです。――――――――――――――――――――――――

side>滝錬太郎<

何故だろう？目の前に山のように積んである書類を目にしてため息を吐きたくなる。

働きたくないでござる。学校帰りに会社による生活はもう嫌だ（泣

「お疲れ様です社長、次の書類をお持ちしました。」

そんな俺の気分とは裏腹に、眩しいほどの笑顔を向けながらも大量な書類を持ってくる幼女版八雲紫にそっくりな少女

「あぁ、ありがとう京」

今は『橘京』と名乗っているが、実はこの人は俺と同じ転生者なんです。

さらには本名はスプリングフィールドで、しかもチート能力の持ち主で「境界を操る程度の能力」を持っている・・・・・・とにかく凄い子である。

そんな人が何で俺の秘書なんかをやっているのか未だに理解できません。

彼女との出会いは今でも鮮明に思い出せる。（驚愕的な意味で）

社長室で仕事としているときにスキマが開いて彼女が落ちてきたのだ、現れたのは幼女ｖｅｒの八雲紫。

ついに俺も幻想入りかと思い話しかけてみたのだが、話を聞いているとなにかおかしい。

彼女は紫本人ではなく、名は『ルキ・スプリングフィールド』というらしい。

転生者で能力持ちでオリ主らしい・・・・・・なーにそれ？おいしいのー？

とも思ったが彼女の話を聞いていると結構大変な思いをしていたらしい。

魔法が満足に使えなくて能力も使いこなせないのに英雄の子とか死亡フラグ立ち過ぎだろう。

そりゃあ日本が恋しくなっても仕方がないと俺も思う。

流石に不憫に思い日本にいる間だけでもここに住めばいいと思い

「俺のところに来い」

と言ってしまったのが拙かったのか、一向に故郷に帰る気配がない。

まぁ凄く仕事できる子だから助かってるんだけどね。

ピロリロリン♪
・滝は幼女を仲間にした
・警備部が１０００人を突破した
・風間さんに彼女が出来た

しかし、一言もの申したい　幼女ｖｅｒ紫　可愛い

幼女を拾った（後書き）

あれー？こんなに長くする気はなかったのになんか長くなってしまった。

何で本来三話でする予定だった話は次話に持越しです。

感想待ってます。

滝グループ『警備部』（前書き）

トリコロールさん、クロポンさん、†まっち†さん、アツシ、白銀の騎士さん、水川さん感想ありがとうございます。感想をいただけると会社から帰ってきた後もまた書こうという気持ちになります。

滝グループ『警備部』

ｓｉｄｅ＞風間さん＜

世界に名だたる滝グループに存在する警備部だが、元々は魔法使い対策のために作られた部署である。

しかし、現在その部署が行っている仕事は会社の警備だけではない。警備部に所属する社員は１０００人を超える。しかも八割以上が魔法使いである。

この数の魔法使いを警備のためだけに使うのは余りにももったいない。

そこで考えられたのが裏の仕事専用の何でも屋である。

勘違いしてはいけないのはここで言う『裏』とは『魔法』のことではなく、『非合法の仕事』の事だ。

企業スパイは勿論の事、要人警護に密輸にｅｔｃ

例を挙げるときりがないがこれらの事を魔法使いならば比較にならないほど低コストで行う事が出来る。

これは勿論表の仕事にも言えることだが、世間の目があるためまだ実現は出来ていない。

そのため現在は裏でばかり行っているのが現状だ。当初はホンの思いつき程度だったのだがこれが大当たり。

今では国のお偉いさんも常連として存在している。特にボディーガードとしての依頼が多い。

現代社会においてどれだけ武道に優れた人物も拳銃に勝てはしない。

魔法使いは常日頃からバズーカ砲を持ち歩いているような存在なのだ。

当然魔法使いにボディーガードを勤めてもらう方が安心できるのだろう。

顧客の思考をそういったように誘導させるために『魔法使いである事は知らせてある。』

隠した場合に我々にメリットがないのも理由ではあるが。

宣伝として認めてしまうほうが利益につながるのは明らかだ。

もちろん、初めの頃は自分にも教えろと脅迫まがいのことをする者もいたが、武器を持っている人間と大して違いはないと説明すれば大抵の人は

納得してくれた。

当然中にはしつこい人間もいたが、そういった方には物理的な意味で消えていただいた。

この事は社長秘書の京さんに許可をいただいている。

と言うよりもこのビジネス自体が彼女の発案だ。

彼女は若干七歳にして恐ろしいほど冷徹な判断を下す。

社内で社長を裏切る行動を起こそうとすれば真っ先に彼女に始末されるだろう、もちろんうちにそんな馬鹿な事をする社員はいないが。

このビジネスは依頼内容によって金額が大きく変動する。

その為簡単な仕事の場合は社外のモグリの魔法使いに仕事を斡旋したりもする。

仕事を求めている彼らにとっては願ってもいないことだ。

当然断る事など非常に稀で、むしろうちの会社を仲介所として活用している者も少なくない。

その所為か、現在ではうちの会社を中心としたビジネスネットワークが形成され、警備部は所謂ギルドのような顔を持つようになった。

その事を知った社長はまた仕事が増えると愚痴っていたが最終的には我々に『全て任せる』と言ってくれた。

社長はなんだかんだ言いながらも我々を信頼してくれている。

裏の世界で生きてきた俺たちに活躍できる場をくれた。

うちの会社に所属していなくとも仕事の斡旋を受けている者は皆社長に感謝している。

俺たちは社長の信頼に応えなければならない、いや、必ず応えてみせる。

この恩を返すためにも。

ｓｉｄｅ＞滝錬太郎＜

うちの会社はアホしかいないのかっ！！

風間さんの報告を受けたときは流石に頭が痛くなった。

何でも屋は別にいいさ、非合法の仕事も利益につながるなら別にやってもらってかまいません。

でもね、なに堂々とバラしちゃってんだよ！

バレるのとバラすのは違いますからっ！！

しかも裏の仲介所とか意味わかんないから、普通の企業のする仕事じゃないからね。

わかってんのかなーたぶんわかってないんだろうけど。

もういいや頭痛い、好きにしてくれ

この時俺は、風間さん達に『全て任せる』と言ってしまった事をあんなにも後悔することになるとは思いもしなかった。

滝グループ『警備部』（後書き）

会社行かずにＳＳ読んでいたいです。
皆さんの感想のおかげで私はまだまだがんばれます。
でも毎日更新は無理かも・・・・。

動き始めた世界（前書き）

ぬこぬこな俺さん、ＲＡＧＵＮＡさん、ソルバ１３さん、ビウィグさん、水川さん、たぬきさん、卓朗さん感想ありがとうございます。
作者はまだがんばれます・・・メイビー

動き始めた世界

「赤字だな」

「赤字ですね」

「赤字ですな」

本社会議室にて今月分の業務報告書を前に唸っているのは、滝錬太郎、橘京、風間育郎の三人である。

「風間さん、俺は確かに全て任せると言ったが利益を出せなくなってもいいとは言ってないよ」

報告書には月々での部門毎の収支結果が記されている。

先月までは用意の成績を残していた警備部なのだが今月に入って急激に成績が落ち込んでしまったのだ。

理由は世界中に存在する『魔法協会』である。

警備部が裏の仕事で魔法を使用している事に感づき我々の周辺を嗅ぎ回っているのだ。

その為、仕事の後の事後処理にたいしての費用が掛かっているのだ。

それだけお金をかけた甲斐あって向こうにはまだうちの会社の存在はバレてはいないようだがそれも時間の問題だろう。

錬太郎の言葉に肩を落としながら風間が答える

「申し訳ありません社長、魔法協会がこんなに早く動くとは・・・。ですが安心してください。

今後このような事は起きません。」

風間に続き京が口を開く

「報告が遅れてしまいましたが、既にこの件に関しましては対策をとっております、

その結果として既に世界各地の代表の方々から返信が届いております。」

二人も遊んでいたわけではない。魔法協会の動きに合わせて此方も動き始めていたのだ。

「代表？何の話だ？」

「私が行ったのは策というほどのものではありません。

ただ単に世界各地の魔法結社に同盟の呼びかけを行ったのです。

現在、真に遺憾ながら魔法協会は世界中に勢力を伸ばしております。

表向きは世界各地の結社も協力的な姿勢を見せてはおりますが、それ以上に不満を持った人間は多いのですよ。

いきなり自分の土地に来て協力体制を敷くように言われても納得なんて出来るわけないでしょう？

魔法協会は長い年月をかけて勢力を伸ばしていたようですが、『国家』、『人種』、『思想』の格差と言うものは数百年の年月で埋められるものではありません

からね」

京の答えに珍しく難しい顔の錬太郎

「つまりそういった不満を持った奴等を手を組むと？」

「そうです。条件として

・同盟に参加した結社は互いの勢力圏への過度の干渉を控える事

・他の組織が勢力を無理に伸ばそうとした場合加盟している組織は鎮圧に当たること

・其々の魔法を財産として認識し、絶やさぬよう協力し合う事

の三つを出しておりますが、これには全ての結社が納得済みです。

そして前提条件として、『魔法協会の排斥』があります。
これはあくまで協会の排斥であり、魔法使いの排斥ではありません。
此方の同盟に参加する魔法使いの結社も非常に多いですからね。」

簡単に言うが実行に移すとなれば難しい話である。しかし彼女達は見事まとめあげて見せたのだ。
風間育郎、橘京は間違いなく優秀な人間なのだろう。

「一つ聞きたいんだが、既に動いているんだな？」

「はい、因みに本日午後から各地の代表との顔合わせが御座いますので出席してくださいね？」

「だが断る」

そこに先ほどまでの緊迫した空気はなかった。錬太郎が空気に耐えられなかっただけなのだが・・・。

「・・・・・・お願いします」

「いやで御座る」

「・・一応理由を聞きましょうか、」

「・・・・ぶっちゃけ俺じゃなくてもよくね？魔法はろくに使えないんだし風間さんの方がいいだろ」

「いや俺じゃだめなんですよ、社長じゃなきゃ周りが納得しない。」

「なんでよ、俺は何もしてないでしょうに」

「いいですか？社長は我々が出来なかった事をやってくれたんです。我々裏の人間居場所を与えてくれて職もくれた。

警備部が仲介所として活動し始めた事で世界各地の魔法結社が勢いを取り戻していったんですよ。

他の誰でもないあなたがいたからこそ私たちは今ここに自信を持って立っている事が出来るんです！！」

事実として魔法結社でも錬太郎に対しての評価は非常に高い。

警備部の活動に関しては錬太郎ではなく京の指示で行っていたことなのだが、

他の組織から内部の事がわかるわけもなく、ましてや社員の中でも勘違いしているものが多いのだ。

そうなれば錬太郎の評価が上がるのは当然と言える。

「・・・・・・はぁ、わかったよ出ますよ出ればいいんだろう、チクショウ（泣」

「納得していただけたのなら結構です。」

「あーそうかい。

そりゃよかったな、・・・・・所で一つ気になったんだが魔法協会はうちの人間を追いかけまわしてんだろ？

その経費はどっからでてるんだ？馬鹿にならない金額のはずだぞ」

「・・・恐らくは雪広グループでしょう。

関東魔法協会が存在する学園都市は常識的に考えてありえません。

それなのにどのメディアにおいても一定レベル以上報道される事はない。

メディアに規制をかけられるだけの力を持ちながら、学園の維持を

行うとなると間違いなく大きな企業がついています。
その中でも有力なのが雪広グループです。学園都市内部の事業のほとんどを雪広グループが行っています。
企業としての利益を条件に何らかの取引を行ったのではないでしょうか。
政治家の中にも魔法協会の域の掛かったものが何名かおりましたから。
まぁ記憶操作の可能性も十分にありえますがね。
そちらの方も私に任せてください。何とかして見せます。」
「ん、ならまかせるよ。頼んだよ京」
錬太郎の言葉に笑顔を返す京、彼女にとって錬太郎からの信頼は何よりも価値あるものなのだ。
ただ彼女に任せた事で雪広グループは碌な目に合わないのは決定済みだろう。
しかしそれはまた別のお話・・・・
ｓｉｄｅ＞滝錬太郎＜
報告書には所々に『魔法協会』の名前が見える。関りたくなかった

のに結局関る事になってしまった。

報告会議なのに俺を無視して話が勝手に進んでいく。

しかも同盟ってなにさ、全然聞いてませんから！！

「既に動いているのか」と思わず聞いてしまったが自信満々に頷かれた・・・・・・。

この二人が勝手に何かしでかすのは慣れてきたがこれは無理。

今から出席しろとか俺に全て丸投げだし、俺の死亡フラグが次々に積み重なってゆく。

・・・・・ここって本当に俺の会社なんだろうか？？

動き始めた世界（後書き）

見直す暇がありませんでした・・・・。
関東魔法協会ｓｉｄｅの話を書くはずだったのにそこまで行きませんでした
次回に持越しです
私のＨＰはもうゼロよ・・・

正義と悪（前書き）

ｊｕｓさん、フエンさん、ナオーキさん、タケウマさん、カナメ・カノリさん、ｄａｉさん、たぬきさん、吹風さん、剣玉毛玉さん、モルボルさん、水川さん、偽者さん感想ありがとうございます返信できなくてすいません。急に仕事が忙しくなって時間が取れませんでした。でもしっかり読んでますのでありがとうございます

正義と悪

埼玉県に存在し、広大な敷地面積をもつ『麻帆良学園』。
ここは学園を中心として発展していった都市であり総称として学園都市の通称で呼ばれている。

しかし、それはあくまで表向きの話。
実態は、明治にやってきた魔法使い達によって作られた関東魔法協会の本部である。
その中で、協会の中心となりまとめ役をしているが麻帆良学園本校女子中等部学園長、近衛近右衛門である。

「・・・また、まんまと逃げられたようじゃな」

「申し訳ありません、後一歩のところまで追い詰めたのですが、タイミング悪く野次馬が集まってきまして」

部下の報告に対し苦い表情を浮かべる学園長

「警察、住民の野次馬、急なイベント・・・5回続けて邪魔された

ようじゃの、
しかし随分とタイミングが良すぎるとは思わんかね？タカミチくん」
学園長の問いに聴きに徹していた男、タカミチ・T・高畑が言葉を返す。

「確かに作為的に感じる部分が多いです、ですが現場に集まった人たちはシロでしたよ。魔法使いとの関係性は見えません。」

「気になるのはそこじゃよ、認識阻害の魔法を使っているにも拘らず、住民が我々の存在に気づき尚且つ警察を呼べると思うかね？
ありえんよ、まさか住民全員が魔法無効化能力者なわけがないしの。
これは相手が組織だって動いておる何よりの証拠じゃよ。
・我々の認識阻害の魔法を短時間で無効化する技量を持った魔法使いに、
・警察へ介入できる権限を持ち、
・全国にて対応できるネットワークを持った組織
と言う事になるの。」

「まさか、そんな大きな組織聞いた事がないですよ。」

「儂も聞いた事がない、そもそも魔法協会以外に世界中に勢力を持った組織などありえん。

各地の魔法結社が自分達の縄張りを犯した者を見逃すとは思えんしの。

とりあえず、警察のほうを調べてみるしかないじゃろ。

指揮を執っていた人物を突き止めれば向こうの組織についても何かわかるかもしれん。」

「今僕たちに出来るのはそれぐらいしかなさそうですね・・・。」

どうやら彼等が錬太郎たちの存在に気づくのはもう少し際先の話になりそうだ。

ｓｉｄｅ＞錬太郎ズ＜

「また髄分と豪勢なメンバーだったねぇ」

「・・・えぇ、『ネギま』以外の世界の住人がこの世界にいるとは予想外でしたね」

つい先ほどまで行っていた各結社との会合に、当然出席してきたのは結社の重鎮ばかり、

代理を立ててくる可能性も十分ありはしたがどいつもこいつも『世界にけんかを売る狂人の顔を見てみたい』などとほざいていた。

どうやら錬太郎は客観的にはそう見えるらしい、本人にその自覚も覚悟もないのだが。

しかし相手がそう思っているならばこちらもそれなりの姿勢を見せねばならない。

ゆえに面倒ごとの多い会議だったがそれはいい。

「俺は勘違いしていた、ここはネギまの世界だと。だが違う、ここは似ているだけだ。ただ似ているだけ・・・」

「独逸、アメリカ、ロンドン、イギリス、日本、今回集まったのは２０あまりの結社ですがそのどれもが様々な漫画の世界での登場人物でした。」

「あぁ・・・・・だが、それだけだ」

「・・・はい」

「この世界において彼等が使えるのは魔法だけだ。

彼等の世界における魔法以外の力が使えるわけでもない、唯一に通っているのはその思考だけだろうさ。

中には『使える』者もいるかもしれないが、俺たちがやる事は何一つ変わらん。」

珍しく強気な発言をする錬太郎、彼の悪い癖なのだが彼はテンションが上がると周りが見えなくなる。

感情の高ぶりに身を任せての余計な発言をする。

それが、周囲からの錬太郎に対する評価につながってしまうのだが・・・・。

「そうですね、私たちがやる事に何も変わりはありません」

まぁたいした問題ではない。それも彼の本心である事に変わりはないのだから。

「ところで、部下から報告が上がってきたのですが魔法協会の『魔

法使い』を何名か捕らえたそうですが如何いたします？」

「捕らえた？侵入者か」

「はい、どうやら中には鼻の効く奴もいるようでして、一応何も出来ないように無力化してあります。お会いになりますか？」

「・・・・もう既につれてきているのだろう？」

「はい、社長なら会いたいとおっしゃると思いまして。」

自分の行動を先読みする京に思わず苦笑を返す錬太郎

「俺はそんなにわかりやすいか、まぁ会うけどな」

「貴方がわかりやすいわけではなく私が貴方を知っているだけです。・・入ってきなさい」

京の声に返すように数名の魔法使いを引き連れた警備部の人間が入ってくる。

彼等の目には絶望などない、今でも自分を信じ続けている人間の目

だった。

「協会の人間に会うのは初めてかもしれないな、俺が一応この組織のトップを勤めている滝錬太郎だ。

社長でもボスでも好きなように呼んでくれ」

「君みたいな子供が？馬鹿な事を、子供に責任を押し付ける気か！？責任者に合わせろ！！」

「あれ？人の話聞いてねーよこのおっさん。」

「まぁこれが普通の反応でしょう、見ていて不愉快ですが捻り殺していいですか？」

「駄目ですから！無駄な殺しはいけませんって言ってるでしょうに！！」

「無駄ではありません、家畜の餌程度にはなりますよ。こんな生ゴミを食べる家畜が可哀想ですが。」

「僕ぁ最近の君が怖い（泣。

まぁいいさ、ねぇおじさん。俺がこの組織のトップである事は事実だ、そして貴方が捕虜で捕虜である事も事実、それ相応の態度でいるべきだと思うが？」

「何を言っている？もし君がこいつ等を纏め上げているならばなおさらだ！君が間違っていると教えねばならん」

「・・・・うわぁ何言ってんのこのおっさん、話まったく通じてねーし」

「やっぱりサクッと殺っちゃいましょう」

「まだ駄目だっつーに、お話の最中ですから！

なぁ俺たち間違っていると言ったな？なぜだ？俺はそれが聞きたい」

「簡単だろう！いいか簡単に人を傷つけてはならない、盗みを働いてはならない、魔法をそういったものに使ってはならない。君たちはそれがわかっていない、自首しなさい協会のほうには私の方から話をつける。決して悪いようにはしない」

「人を傷つけること、人のものを盗む事、それらが法で定められている事は知っているさ。
でもそれは絶対的に悪い事かよ？」

「当たり前だろうっ！君はっ」

「いいから聞けよおっさん、例えばだ
苛めにあっている者が殴り返して相手を傷つけるのは悪い事か？
その日の糧もままならない子供が生きるために食い物を盗むのは悪い事か？
俺たちは自分の力でそれが出来ない奴等に手を差し伸べているだけだ。立派な正義だろう？」

「そんなものは屁理屈だ！そんなことをしなくても助けを求めれば周りの人間が助けてくれる。
自分が相手を傷つける理由にはならない、ましてやそれに魔法を使う理由がどこにある！！」

「あぁあんたが言ってるのも正論だ。だが皆が皆助けてくれるわけじゃないさ、むしろ見て見ぬ振りをする奴が大多数。

少数に助けられた奴等はいいさ、助けてもらえなかった奴等は我慢するしかない。

だから俺たちに依頼してくる。そして俺たちは依頼を受けて動く。

魔法を使うのはただ単に使えるからさ、魔法は単なる技術でしかない。

俺はね魔法も科学もたいした違いはないと思っている。

火をおこす為に科学においてはガス、オイルなどの資源を消費する。

火をおこす為に魔法においては魔力という資源を消費する。

ほら、同じじゃないか。ただ消費するものが違うだけだろ？」

錬太郎の言葉に開いた口が塞がらない。

それもそうだ『使えるから使う』そんな事を言われては自分たちのアイデンティティが崩れてしまう。

だが、頭のどこかで理解している。彼の言っている事は間違っていないと、しかし・・・・

「だんまりかい、まぁ聞きたい事は聞けたからいいけどね、もう退出してくれていいよ」

警備部の面々は来室時とは異なり暗い影を落としている魔法使いたちを引き連れ退出していく

「社長」

「んー？」

「今日は絶好調ですね」

「急に恥ずかしくなるからわざわざ言わんでくれよ。

なんか話しているうちにイライラして来て口にチャックが出来なかっただけなんだから。

まぁ理由は他にもあるけどね」

「私は強気な社長も好きですよ」

「すいません、直球で言われるとすごい恥ずかしいんで勘弁してください。」

「言うほうも恥ずかしいんですけど」

正義と悪（後書き）

もう残業したくない

朝起きて仕事いって帰って寝るだけの生活はきつい

娯楽がないとしぬ

このＳＳに他の作品のキャラを出したくてしょうがないんですよ。

そのうちだします。

主人公は話数を重ねるごとにかっこよくなって行けばいいなと思ってます

その男、狭間童心（前書き）

たぬきさん　なまけものさん　ＵＳＡＧＩさん　紅明さん　剣玉毛玉さん　ａｏｎｏｕｍｉさん　水川さん　感想ありがとうございます。皆さんからの指摘を受けて此方も随分と構想を見直すことが出来ています。

その男、狭間童心

ｓｉｄｅ＞タカミチ＜

ここは日本ではない。僕は魔法使いとしての仕事として外国を飛び回っている。

その殆どが各地の存在する非合法な組織を潰すためだ。

奴等は方の合間を縫って活動しているため表の組織には任せて置けない、だからこそ僕たちが動いている。

今僕がいるのはドイツの経済の中心地とも言えるフランクフルトだ。

近頃急激に勢力を拡大してきた密売組織を追ってここにたどり着いた、今日ここで大きな取引が行われるらしい。

現地の魔法結社の協力も取り付け人員にも問題はない。
唯一つ気になるのは護衛として雇われている魔法使いがいると言う事だ。
これまでも協会に未所属の魔法使いが護衛としてつく事がなかったわけではないが、近頃はどうも様子がおかしい。
明らかに錬度が違うのだ。素人ではなく明らかに専門的な訓練を受けたプロの動きをしている。
さらに不可解なのはこれまで誰一人として捕縛できていないことだ。
一人も捕縛できないのは余りにも可笑しい。此の侭ではいけないとは思うが打つ手がないのが現状だ。
今回僕が呼ばれたのもそれが理由である。
本来ならば仕事を請けるつもりはなかった、僕には他に優先してやるべき事があったからだ。
それは『ルキ・スプリングフィールドの捜索』だ。
ある日突然姿を消してしまった彼女、彼女の捜索は表立って行われ

ていない。

彼女の存在が特殊である事も関係しているが、周囲の人間があまり積極的ではないこともある。

彼女は魔法が使えないために周囲から浮いていたと調書にはあった。

事実としてはもっとひどい内容だったようだが今では確認のしようがない。

何故なら話を聞こうにもその殆どが行方がわからないのだから。

彼女の失踪後、真っ先に疑われたのは当日町を訪れていた本国の査察官だが失踪の二日後に『古井戸にて転落死』していた。

運悪く足を滑らせたと調書にはあったが仮にも魔法使いが飛ぶ事もなく転落死など考えられない。

また彼女を迫害していた者達は忽然と姿を消していた。

家を調べてみても料理の途中であったり、テレビがついたままだったり、まるで日常生活の中で忽然と神隠しにあってしまったかのように消えていた。

その為か、以前彼女に危害を加えた事のある者達は必要以上におびえている、次は自分たちの番ではないのかと。

彼女の捜索が難航している理由はもう一つある。

彼女の写真が一切残っていないのだ。
写真を撮ったことがないわけではない。
確かに撮ったはず、しかし彼女の捜索を行おうとした時既に写真は消えていた。
捜索をしようにも顔がわからなければ探しようがない。
特に彼女はネギ君とは違って両親とは似ていない。そのため探しようがないのだ。
だからこそ少しでも面識があった僕が捜索にあたっているのだけれどまったくと言っていいほど足取りがつかめない。
今彼女はどこで何をしているのだろうか。せめて無事でいてくれればいいのだが。

「高畑さん！着きましたよ」

今回の仕事を一緒に受ける仲間からの声に高畑は意識を戻す。
高層ビルが立ち並ぶ町並みの一角にある巨大な貸しビル
ここで取引が行われているはずなのだが静か過ぎる。
人の気配がしない。間違いなく人払いの魔法が使われている。

高畑達に緊張の糸が張り詰める。

「お初にお目にかかる、たしか高畑さんでしたか」

「・・・・どこかであった事はあったかな？初対面な気がするけど。」

彼はいったいいつからそこにいたのか、目の前ににいるのは僧衣を着た壮年の男

ビルを見上げる高畑たちに声をかける男、他の者達はともかく高畑ですら接近に気づけなかった。

内心冷や汗を掻きながらも返事を返す高畑、

「いやいや、初対面ですな。ですがあなたは有名人だ、私が知っていても不思議はないでござろう？」

「・・・なるほど、つまり僕を知っているあなたは魔法使いと言う事かな」

「いやいや、当たらずとも遠からずと言ったところですな。」

「・・・？ところで名を聞いてもよろしいかな？貴方だけ一方的に知ってるのは不公平でしょう」

「いやいや、これは失礼でござったな。拙僧は日蓮宗分派が一つ妙恩一派、狭間童心と申す」

妙恩一派は日本で協会にも属さず中立を保っていた組織、日蓮宗は大きいが分派だけとなると規模は随分と小さくなる。

その為魔法協会も余り干渉していない組織だったが、

「・・・それで童心さん、何故ここにいらっしゃるのですかね」

「いやいや、貴方もお人が悪い。分かっていながらお聞きになるのですからな、・・・・そうですな護衛でござる。

もっと分かりやすく言えば、あなた方の敵ですな」

言い終わるや否や、高畑は居合い拳を放つ。居合い拳は拳をポケットに入れ居合いに見立てて拳圧を繰り出す技である。

言うのは簡単だが実際はかなりの威力を持った技であり、一般人ならば一瞬で挽肉となる危険な殺人技である。

それも目の前にしても童心は微動だにしない。
確かに直撃だった、しかし傷一つない。
障壁を張ったわけではない。ただそこに立っているだけ。

おかしい、気味が悪い。本気で行かなければこちらが殺られる。

遠い異国の地にて狭間童心と高畑・T・タカミチの戦いが幕を開けた。

s i d e ＞錬太郎＜

「童心のおっさんが？」

「はい、英雄で遊んでくると」

狭間童心は先日の連盟会議にて加盟した日蓮宗から食客のような形で世話をしている男である。

かなり適当な男だが組織の中でも幹部の一人らしく実力は高い。

うちの会社でも渡り合えるのは風間さんクラスの者達だけだろう。

「いや止めろよ、高畑が死ぬよ。組織の看板背負ってる奴を始末したら後々面倒になるって分かってんだろうに」

「一応殺すなとは伝えてありますし大丈夫でしょう。もしもの時の保険も用意してありますし。」

「保険？」

「先日の会議にて関西呪術協会のものがいたのを覚えていますか？

その者の手引きで近衛木乃香に一つ呪いを仕掛けてきました。」

「また俺の知らないところで何やってんだよ・・・しかしあの組織

もガタガタだな。身内に裏切りられるとは後がないのかもな。風間さんは？」

「私に送られた追っ手の始末をお願いしました。風間さんならすぐに済むでしょう。」

「多少のイレギュラーはあったが順調に進んでいるな。雪広グループのほうも順調にいっているようじゃないか」

「えぇ、今後は今までのように資金を自由に動かす事は出来ないでしょうね」

雪広グループは大きな組織である。当然いくつかの派閥に分かれてはいるし一枚岩ではない。

勿論一番力を持っているのは会長率いる雪広一族の派閥である。そのため他の派閥が束になっても大多数が会長派のため敵いはしない。

魔法協会と繋がりがあるのも会長派である。しかし会長派全員が魔法の存在を知っているわけではない。

知っているのはあくまで会長派のさらに一部の者のみ

今回、京が行ったのは会長一派全員に魔法の存在と資金の流用が行われているのを伝えた事である、

同じ派閥内でも、自分たち関知しない金の動き、それを知ったときの不信感は非常に大きく膨れ上がった。

まして彼等は魔法の存在を知ってもその有用性までは理解していない。

彼等からしてみれば裏切りにしか感じないだろう。そこに付け入る隙がある。

グループ内が混乱しているうちに反会長派を抱き込みＭ＆Ａを仕掛けた。

といっても相手も大企業、まだ決着はついてはいないが大分勢力を削る事が出来た。

身内からの監視と勢力の低下により雪広グループには以前のような力はない。

それでも大企業である事に違いはないし、派手に動いた事で勘のいい魔法使いたちはうちの会社を警戒する。

まぁそれでも向こうに打つ手がないことに変わりはないが。

「しっかし、俺たちは完全に悪役のポジションにいる気がするんだけど。」

「何を今更、いいじゃないですか。私たちは仕事をしているだけですよ。」

「別に厭なわけじゃないさ、寧ろ正義の味方を名乗るよりずっといい。

ただ、うちの社員共が心配でね。どいつもこいつも家族持ちが多いからねぇ

そいつ等がどう思っているのか心配なんだよ。」

「それこそ余計な心配ですよ。だって皆好きでここにいるんですからね。」

「・・・そっか、それを聞いて安心したよ。

何はともあれ、そろそろ頼まれてた仕事をやるかね」

「皇族からの依頼でしたね。また随分と時間がかかってしまいましたね。」

「仕方ないさ、事が事だからな。俺たちの次の仕事は・・」

『世界樹神木・蟠桃の奪取だ』

その男、狭間童心（後書き）

ハードルあげすぎた。

ぶっちゃけ会議に出席していた組織は七つくらいしか考えてません。

なので感想でなにかいいのがあったら教えてくれるとうれしいです。

全て出すわけではありませんが、ある程度構想を立てていると話が作りやすいので。

連盟の本音（前書き）

お久しぶりです。
しばらく更新出来ずすいませんでした。
実家が東北で家がかなりダメージを受けましたが私は無事です。
日本語のおかしい部分がありましたらご指摘していただけるとありがたいです。

連盟の本音

ＳＩＤＥ＜風間＞

日本の関東圏においてビルが立ち並ぶ光景がよく見られる。
その中の一つ一際高く聳え立つビルに滝グループの本社は存在する。
当然そこで働く社員の数も多い。一般人も魔法使いも関係なくそこに存在している。
そのビルの中でも僧衣を着た一人の男『狭間童心』。
一般社会の中で会社に僧衣を着てくるものなど普通はいない。
だがこの会社の中でそれを気にするものはいなかった。
一般人も魔法使いも分け隔てなく過ごしている、
そんなある意味で異質ともいうべき場所それが滝グループである。
そんな彼がいるのは本社上階層にある一室。
そこには彼だけでなく社員とはいえない風貌の人物が数人存在していた。

「随分と派手に楽しんだようじゃないか狭間よぅ」

狭間に問いかけながら椅子に身を沈めている一人の男、錬金戦団の桐生誠

彼は先日の連盟会議にて加盟した組織から派遣されてきた人物の一人である。

今現在この部屋にいるのは彼らを含めて四人。

日蓮宗　狭間童心

錬金戦団　桐生誠

魔術協会　アイラ・F・如月

滝グループ　風間育郎

「いやいや、つい好奇心が勝ってしまいましてな。手を出さずにはいられなんだ。」

桐生の嫌味に笑みを持って返す狭間童心、しかしそこに険悪な様子

はなかった。

「まさか殺してはないだろうな？」

狭間に問いかけるのはスーツ姿の女性、魔術協会のアイラ・F・如月

「ご安心くだされ、互いに手の内を見えずに終わりましたからな、今頃は麻帆良で教鞭をとっているのではないですかな」

高畑の戦いのあと彼は何食わぬ顔で帰国してきた。

足並みをそろえよう年端ばかりの時期に彼の行動は周囲にいらぬ波紋を呼ぶ。

当然そんな彼の行動を他の組織がいい顔をするわけがない。

「うちとしましては、あまり派手に動かれるのは遠慮して頂きたいのですがねぇ。」

とまぁ、風間がつい釘を刺すのも致し方のないことかもしれない。

「今回の件で他の組織のものまで動く可能性も十分にあるのではな

いか？」

つい先日連盟という枠組みの中で手を組んだばかり。

一日二日で仲良くできるわけもない。

そもそも明確に取り決めされているのは、互いの組織への不干渉だけといっても

間違いではない。

さらにゆうならば抜け駆けの禁止といったところか。

そんな中ですぐ信用しろというのがそもそも無理な話である。

「いいじゃねえか、どうせ連盟に加盟したやつらはどこも腹ん中で何考えてるかわかん

ねえやつらばっかなんだからよぅ」

「貴様も含めてな」

桐生の言葉に反応するアイラ。

彼女は協会のものでも新参者らしく周囲の組織への警戒心が一際強い。

彼女だけにいえることではないが、
魔術結社に所属するものの中には他の結社を見下す傾向のあるものは少なからず存在する。
実力のあるもの、長くこの世界に居座るものほどその傾向は少なくなるわけで

「喧嘩売ってんのかてめぇ」

「貴様に買う度胸があるのか？」

頭では分かっていても桐生としても面白くはないのは当然だろう。

「はいはい、皆さん喧嘩は外でやってくださいな。
社内の備品が壊れたらしっかり請求させていただきますからね。
皆さんが心配されるのも分かりますがそれはないでしょう。
元々麻帆良を潰すだけなら如何にでもなるんですから。
その後に問題があるからこそ皆さんが連盟として協定を結んでいるのですしね。」

「ふむ、さらに言わせて貰うなら、宮内庁より霊地奪還の依頼を連盟として受けた時点
で麻帆良に下手に介入できなくなったわけですからな。
今更麻帆良を攻めても無駄に金がかかるだけなのは明らかですな」
結局は風間や狭間のような年配者がフォローに回ることになる。
そこは一般社会も魔法社会も変わらないのかもしれない。
「其処まで言い切るのならば私としても文句はない」
「そういえば、今日は秘書の嬢ちゃんはいねえんだな」
ふと思い出したように口に出す桐生、普段こういった場所に出るのは風間ではなく京
の仕事なのだ。
「えぇ、最近働きづめでしたから昨日から有給消化にはいってるんですよ」

「あのワーカーホリックが自分から休みを取るとは珍しいな」

まだ中学生にもなっていない年齢であるにも拘らず、周囲にまでワーカーホリックと認

識されているというのは少々悲しいものがある気もするが、

本人は欠片も気にしていないだろう。錬太郎の右腕としてあるだけで彼女は満たされているのだから。

「まぁ自分からではなく、今回は社長の誘いもあってなんですがね。あの人が社長の誘

いを断るなんて想像出来ませんし。」

「ふむ、でーとでござるか。いやいや若いとはいいことですな」

すでに社内に留まらず京が錬太郎が好きで好きでしょうがないのは連盟でも知られてい

る事実だったりする。

・・・・・恐るべし京の愛

「あの堅物が惚れる男ねぇ、一体どんな恐ろしいやつなんだか」

連盟内でも優秀さが目に付く京が心酔する男、滝廉太郎。・・・・・

と彼に対して周囲が

勘違いを続けていくのもしょうがないのかもしれない。

・・・・レンタローもげろ。

ＳＩＤＥ：秋葉原

秋葉原は世界一の電気街・・・・という宣伝をよく耳にするがぶっ

ちゃけオタクの聖地

である。前世でオタクであった彼や東方厨だった京にとってもそれ

は変わらないという

話で、二人が遊びにいく
としたら自然と足が赴くのは当然といえるのかもしれない。

「やっぱりアキバは品揃えがいいな。アニメ〇トもあるしとらの〇なもあるわけだし」

どれだけ転生しても根っこの部分はそう変わらないわけで

「アキバもいいけど偶には他のところもいきたいです。いやアキバはアキバでいいです
けど・・・」

だがまぁ、京としてはデートのときぐらい別のところに連れて行って欲しいと思うのは
当然だろう。錬太郎としてはデートとは思っていないのだが。其処はご愛嬌。

「そういわないでくれよ、次の機会にはちゃんとした所に連れて行くからさ。
それに今回アキバに来たのは仕事にもかかわることがあったからなんだよ。」

「仕事ですか？何かありましたっけ？」

京は錬太郎の秘書であるため基本的に彼の仕事のスケジュールは彼女が管理している。

その為分からない訳はないはずなのだが

「霊地奪還の依頼を受けたあとに、個人的に麻帆良に関して色々探りを入れてみたんだ。

そしたら結界に関して気になることがあってね。

結界を張る場合当然のこととして幾つか基点を定める必要性があるわけだけど。

上空から見ても地上部にはそれらしい建物はなかったんだ。」

「カモフラージュではないんですか？」

「もちろん地上部も詳しく調べたがね、特にそれらしいものはなかった。

まぁ上がだめなら下ってことで地下部分を探ってみたら案の定

結界をなぞる用に地下に妙な空道があったのさ。
どうやら麻帆良は電子精霊を使って結界を管理してるようでね。
しかも、サーバー管理しているのは麻帆良工学部の魔法生徒達と
明石教授率いるスペシャリスト達なわけよ。
正直な話、正面から攻めるには一筋縄には行かないようなんだよね。
」
そういって彼が見上げた先にあるのは古い貸しビルのみ。
どうやら一階は「ブラウン管工房」という古いテレビを取り扱っている店のようだ。
しかし彼が見上げているのは二階、其処にあるのは
「未来ガジェット研究所？」
「そう、目には目をスペシャリストにはスペシャリストをスーパーハッカーの力を借りるのさ」
続く

連盟の本音（後書き）

え一久しぶりな投稿のため変な部分があるかもしれません。
感想で指摘等ではなく悪意あるものは投稿しないでください。
そっと読むのをやめてください。
正直なところ逃げてました。
楽しみにしていただいてる方には申し訳なく思っています。また細々とですが投稿を再開しますのでよろしくお願いします。
もう一度あったらメタルスライムよりも早く逃げ出します。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4180l/

ネギまで会社を作ってみた。

2011年6月24日16時46分発行